

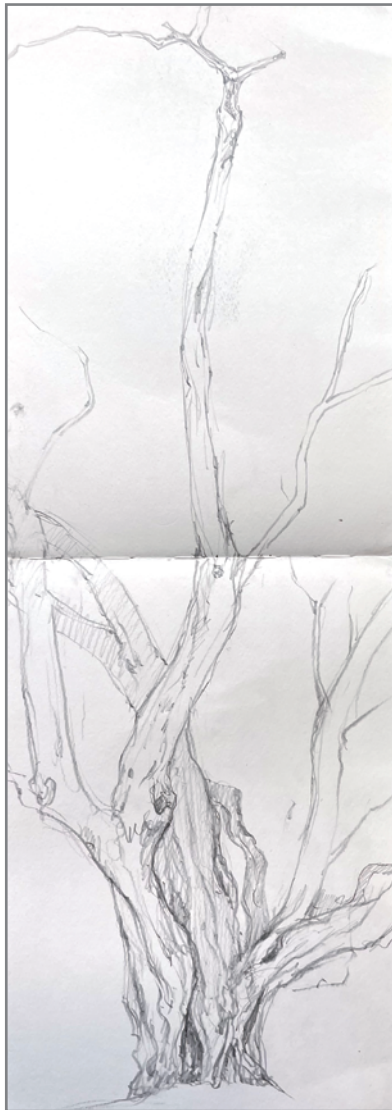
# 『Cliff Edge Project うぶすなの水文学リサーチプログラム中間報告』

## 一 貴僧坊水神社奉納絵馬の試作一

漆原 夏樹

貴僧坊水神社の祭神である罔象女神を絵画化するにあたり、本プロジェクトの中間報告として貴僧坊周辺の水資源とそれを取り巻く環境を取材し、本作品のための試作を制作した。

取材は2022年8月19日、9月16日、10月14日の日程で主に貴僧坊周辺の水資源、地形的特徴、信仰の痕跡を感じられる場所などを中心に巡り写生を行った。



8月19日取材 椎木平の椎木



9月16日取材 貴僧坊 権現様



9月16日取材 菜畑の滝

今回の取材を通して最も印象的だったのは、水を通した恵みと厄災の循環の痕跡、それにまつわる信仰のありようが混在し圧縮されている景色だった。それは日常の中から神話が生まれる気配とも言え、つかみどころのない『カミ』の像を描く上で思惑を巡らす手掛かりとなった。

## 罔象女神像の作画について

古来から影向図や垂迹画など『カミ』を表す絵画は多々あり、人知を超えた存在を表すにあたって巨大化、非実体化、逸脱した色彩、見立て、など様々な操作がなされている。今回の作画にあたってはそれらの表現形式を手掛かりに図像化を試みた。また使用する素材、技法においては、罔象女神が和紙の製法をもたらしたという伝承がある越前の雲肌麻紙を支持体とし、水を媒介として描く技法を用いた。

今回の取材を通して水の恵と厄災の循環、その循環が信仰を生み『カミ』を顕現させる構造をあらためて体感し、それらが圧縮され一つの画面で循環する構造、つまり物質である水と『カミ』に祈りを捧げる思念の循環を、画面内で水にまつわる図像を連環させることで表現できるのではないかと考えている。



『罔象女神像試作』 雲肌麻紙、石州紙青金箔裏箔、墨、胡粉、岩絵具、水干絵具、金箔、金泥 41.0×54.6cm



## 罔象女神図展示案

展示の際はどのように角度をつけて展開し、装着した額等により自立できる構造を考えている。



試作を通しておおその方向性と作画にあたっての表現技法の実験は進められたが、神像としての造形の研究、貴僧坊周辺の山容や植物のさらなる取材の必要性を感じた。絵馬としてどのような形式で仕上げるのか、作品の寸法など最終的な着地点も関係各所と詰めつつ早々に見極めていきたい。また、水神社の丁屋での展示が可能ならば、別の切り口からの水文学にまつわる作品の構想があるのでこちらの実現も視野に入れていきたい。



丁屋展示作品草案